

平成30年5月1日発行 春燈/第73巻第5号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2018 May

5月号



主宰の句

安立公彦

麦踏の足裏にとほき戦後かな

二月尽先師の齡いつか越え

葛飾や川瀬に高きいかのぼり

紅梅の八重の暮色や真砂女の忌

烏雲に聖書読みたき日なりけり



久保田万太郎の句

しらぬまにつもりし雪のふかさかな

「春燈」昭和三十一年

先日、東京にも雪が積りました。そのときふと新劇の「ふりだした雪」と、この句が浮かんできました。

この句には長い前書があります。それを読むとこの句の良さがわかります。そこで前書を記します。

へ人をうらめば ひともまた われをうらみてしども
なや へ月かげの きえてあとなし ゆめぞとも へい
つふりいで、 閨の戸に いつつもりたる雪の嵩

今井弘雄

久保田万太郎の句

とりわくるとききの香もこそ櫻餅

『冬三日月』昭和二十四年

一読して、語らいの座が見えてくる何とも微笑ましい一句。私の好きな句である。

とりたてて難しい言葉など使われていないのだが、醸し出される深い情緒はどこからくるのであろうか。

隠し味は「香もこそ」の「こそ」にあると思う。ここで桜餅そのものより香が主役に立つてくる。これこそが奥深い抒情性を持つ万太郎俳句の世界。

篠原幸子

燈下集

○ 小嶋 恵美

庵主さま庭に居られり梅の花
うぐひすの眼の気配あり傘を干す
猫の足夫の足跡拭くや春
少年に眩しき姉や黄水仙
水清き叡山称ふ卒業歌

○ 三宅 文子

早春とふ佳き言の葉の季となりぬ(祝)
佗助や衿足にほふにじり口
あなたなら話せるはなし梅月夜
雛あらはかなきいろをこぼしけり
山笑ふなかなか売れぬ山ひとつ

○ 太田 慶子

水鏡山の笑うてをりにけり
まんさくや地蔵の前の袋菓子
しら梅や退屈さうな厨子の弥陀
散るは億劫まんべんに梅咲いて
母のこと子のこと雛かざりけり

○ 尾野 奈津子



街音の軽き弾みや春きざす
身の内に急かすものあり新芽立つ
ひと跳びに渡る小川や青き踏む
二の午や谷戸の祠の灯りある
豊籟てふ老いの勲章長春花

○ 青柳雅子

大寒の皆既月蝕赤く燃ゆ

春寒のこのみ言うて暮れにけり

短冊の和紙が墨吸ふ春の宵

夫と来し遠き道のり臥竜梅

赤ん坊と喃語の会話つくしん坊

○ 木多芙美子

風二月寄り添ふものの欲しきかな

庭の凍てゆるみ初めたり永晷忘

紙風船折り目正して畳みけり

下萌や汚れちまつた靴の先

飾られぬ雛のささめき聴く夜かな

○ 小張志げ

九天の闇を揺るがす大雪崩

青春のとんがる心麦を踏む

冴返る木偶人形の白眼かな

大川や小舟水脈曳く寒の明

二月礼者瓶の風呂敷包みかな

○ 江草礼

樹氷縫ふシユパール光る起伏かな

笛を吹く小指の欠けし雛飾る

母に似し指に匂ふや山椒の芽

蔦の芽の卍模様や煉瓦塀

他人の肩かりて居眠る木の芽時

○ 岩永はるみ

早春や海をはるかに風見鷗

はれの日に下ろすネクタイ風光る

一筋の轍の深し冴返る

かの世とはこの静けさや春障子

初恋の人の文らし雛の箱

○ 林紀夫

昼酒や追雛の豆をつまみとし

梅ヶ香や鑿跡しげき切通(鎌倉三句)

春日燦川喜多映画記念館

亀鳴くや政せぬ三代目

無理せずに登れと山の笑ひけり

棟梁の鉋屑透き日脚伸ぶ

○ 小泉 貴弘

味のある皺こそよけれ干大根

アメ横や何も買はずに懐手

万太郎旧居のともし臍かな

望郷のつる余生や烏雲に

○ 中野 さき江

淡き日を分かちて木々の芽吹きかな

一山の音なき真昼日脚伸ぶ

強がりのよわみに勝てぬ春の風邪

雛の灯のくらきにゆるる影ふたつ

人に逢ふ迷ひの春の寒さかな

○ 栗原 完爾

昼過ぎは風立つバレンタインの日

卒業子珈琲はモカ淹れにけり

春浅しお湿りほどの昼の雨

春の雲風やはらかに雑木山

茂吉忌や兜太の無頼惜しむがに

退院のうれしさ半分寒き家

○ 小菅 礼子

リハビリの万歳出来て山笑ふ

ほめられし白髪に風光りけり

久に逢ふ亡夫嬉しや春の夢

春障子庭木の風の見えにけり

○ 本多 遊方

御室派のみほとけ集ひ梅香る(東京国立博物館)

春の闇千手観音膝崩す

名刹や春満月の置き所

戸を閉めることも覚えよ恋猫よ

猫の恋奪ふ人界罪深き

○ 武田 巨子

雪晴の白より白き嶺の色

寒禽の声尖らすは吾を呼べり

あと少し伸ぶれば大地草氷柱

眼をつむりたきことひとつ玉子酒

鬼潜む隙無し節分万灯籠

余言

安立公彦

葉の花忌沖の潮日のくつきりと

西川 保子

「葉の花忌」は二月一二日。小説家司馬遼太郎の忌日。広辞苑第七版はこう記す。「本名福田定一、大阪生れ。乱世・変革期の群像を描いた『竜馬がゆく』『国盗り物語』『坂の上の雲』などの小説や、紀行『街道をゆく』で、司馬史観と呼ばれる柔軟な歴史解釈を示す。文化勲章受賞」。

現代の作家で司馬遼太郎ほど幅広い読者層を得た作家は居ない。西川さんもお一人か。「沖の潮日のくつきりと」は、如何にもこの作家にふさわしい。享年七三歳。

永らへて今ひとたびのさくらかな

柴崎 富子

作者は現在入院中と聞く。いつも甲武信さんと一緒に本

部句会に見えていた。仲睦まじい様子が思い出される。

「永らへて」は、もとより長命を得ての意。「今ひとたびのさくらかな」に言葉では言い尽くせない思いが感じられる。俳句という表現詩にこめられた願いは叶う率が高い、といつか読んだ記憶がある。本復を願うばかりである。

墨堤のあえかな日差し冬すみれ

松橋 利雄

「冬すみれ」は冬咲く蓮。「墨堤」について、古くは隅田川を「墨田川」と書いたともあると辞書は記す。それは墨田区という名で残っている。辞書は更に、隅田公園がある東岸の堤を隅田堤（墨堤）と謂う、とある。詩歌に現われる「墨堤」はこういう限定に囚われることなく、伸びやかに詠まれることが多い。この句の場合も同じである。

この句、「あえかな日差し」が「墨堤」にふさわしい。如何にも伝統ある墨田川の一景である。

一本の杭のさざ波春立てり

近藤 牧男

二月本部句会での特々選句。講評にはこう記した。「一句の対象となる。物。や。事。を如何に捉えるかの基本が写生。にあることは時代が変わっても不変です。この句の「一本の杭のさざ波」はまさに写生です。しかしその写生が単なるスケッチに終わっては俳句にはなりません。この句の良さは、その「さざ波」が生きているということ

す。それは「春立てり」との呼応のみごとさにあります。現代俳句には、「写生」の良さから逸脱したものもある。しかし、先の講評に述べたように、写生が目的を達するための善き方法であることは変わらない。

江ノ島や春待つ波の子守唄

吉澤忠美子

この句の善さはその調べの善さにある。「春待つ波の子守唄」口中に繰り返してもその善さは変わらない。一つには一句を通して濁音の無いことも、句意と呼応してその善さの一因となっている。更に一句の対象を「江ノ島」に持つて来たのも効果的だ。古来、江ノ島は多くの人に親しみと好感をもつて詠まれた島の名は余り見ない。

作者の住まいは、江ノ島を視界の内とする地域だろうか。『江ノ島や』の切字の用法に、その思いが感じられる。

嬰鏖てふ老いの勲章長春花

尾野奈津子

この句、私を含む歴とした老人諸氏からの賛意の挙手があるだろう。「老い」とは何歳以上を指すか。辞書にはただ「年とった人、年寄り」としか記載されていない。代りに、「老人」を冠した施設や病名は多い。老いの身にとつて、老いという言葉は、余り口にしたくない一つである。結局、「老い」とは、人それぞれの行く末の意だろう。

「嬰鏖てふ老いの勲章」、いい表現だ。まさに勲章だ。「長

春花」は「金盞花」。この句の場合は前者の呼称が良い。

今日すべきことある幸や木の芽晴

山嶋 洋子

一読、詠う人が多からう。まさに「今日すべきことある幸」は、人としての人生の主題である。作者も後期高齢者の域に差し掛かったお一人か。「すべきこと」はその人により異なるが、生きるということの掬り所である。「木の芽晴」が善い。天を仰ぐ姿勢は、また幸を呼ぶ。

兜太遙く故山秩父は春の雪

中村紀美子

金子兜太氏が二月二〇日に死去された。九八歳。簡単に氏の歩みを記す。大正八年生れ。昭和一九年海軍主計中尉としてトラック島に赴任。同三七年「海程」創刊、六二年朝日歌壇選者。紫綬褒章、蛇笏賞、ほか多くの賞を受賞。秩父を故郷とし、父は「馬酔木」の同人金子伊昔紅。

戦後俳句の大きな一方の旗手であり、俳句の本道からは異色の俳人だった。その日秩父は深々と雪が降っていた。

日向ほこ五体の門外しけり

赤岡 茂子

「五体」は、頭、頸、胸、手、足、即ち全身。それらの門を外すという、所謂寛ぎの形。万太郎師に、八日向ほこ日向がいやになりけり∨の句がある。解放感と含羞と表現は異なるが、作品の奥には通じ合う思いがある。

当月集

安立 公彦選



○ 平沢 恵子

石段にゆらぐ光芒実朝忌(鎌倉句)

春光に鳶あり映画記念館

鶯餅の粉の残れる夫の椅子

春愁の影ひく若きアスリート

春風や一步に里の力秘め(祝・葬ハルエ様)

○ 持田 信子

陶片を波間に拾ふ実朝忌

鎌倉を俯瞰の鳶や山笑ふ

魚は氷に上り浮上の潜水艦

ローマの休日王女の一日風光る(山夢映画記念館句)

モンローの衣ひるがへす春疾風

○ 宮崎 紗伎

喝采を挙げて野をゆく雪解川

うれしさの音追ふ音や春の滝

見上ぐれば祈る形に芽吹く木々

癌病棟ノブに吊られし紙ひひな

ビル街の影のひとつや春鶯

○ 湯上 稔子

戌年に生れし歳月追儼かな

春の雪降りつむ里や白川郷

春昼の日差しを返す雪柳

山笑ふ萌黄の彩の柔らかに

菜の花や地球似の星あるといふ

○ 海村 禮子

節分や雀とびゆく風の巾

梅日和天神様に詣でけり

風を背に波音聞きつ麦を踏む

山焼くや明日香路に立つ遠煙

白椿の花を啄む雀らよ

春燈の句

安立 公彦選

母の忌や手毬の糸のほつれたる

東京 遠藤 レイ

喰積といふも老いわれ一人分

女正月友出演の劇を觀に

寒夕焼離れて遠き夫の墓

卒寿なる姫のかざる紙雛

神奈川 犬嶋テル子

三味の音やひがし茶屋町春の宵

春訪へば春のしつらへ武相荘

庄巻のたいまついくつお水取

敷藁にねまる子牛や虎落笛

鳥根 土江 比路

礼拝の小脇にはさむ冬帽子

冬霧や汽笛は沖に尾を曳いて

冬波の忘れ藻乾く日和かな

凍つる風刻々進む皆既蝕

千葉 山浦 紀子

老犬の軒高らか山笑ふ

日溜りに力抜きぬる牡丹の芽

開演の太鼓の連打二月尽

氏名欄に大正あらぬ寒さかな

よく眠る夢は根雪の消ゆるまで

細き月太き氷柱や寝まる家

うんこもて春土育てし兜太かな(惺)

福島 物江 康平

窓開けて仏に告ぐる雪降ると

鬱の字の覚えにくさよ着ぶくれて

隣から追はるる鬼をやらひけり

鯨尺の母の名うすれ針供養

東京 古谷 昌女

雪の夜や胸の振子のこちこちと

雪しまく夜通しびびと鳴る障子

草木の目覚むる気配春の雷

日の匂もるとも籠へ蓬摘む

兵庫 秋山 葛

